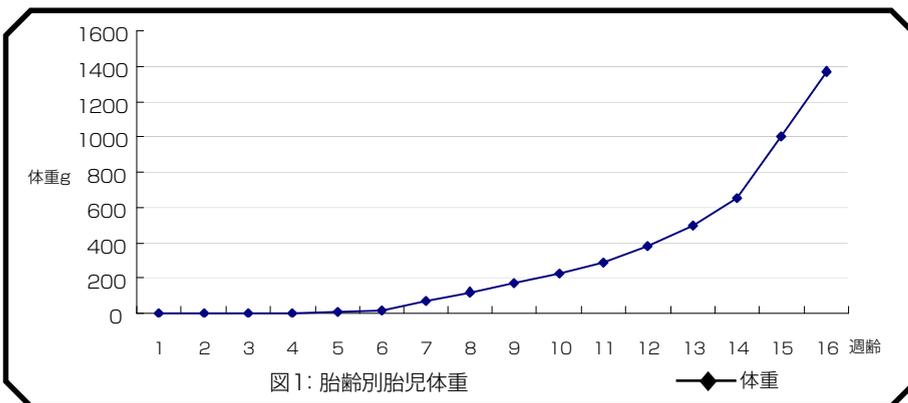


繁殖母豚管理のポイント (3) ポークランドグループ 加藤仁

V. 交配後100日～112日の管理

妊娠末期の12日間の管理であり、母豚は分娩豚舎へ移動して分娩を待っている期間です。この時期で重要なポイントは僅か、12日間で胎児が急速に成長してほぼ生時体重なみに、達することです。約100日齢で655gであった胎児が僅か、12日間後の16週齢(112日齢)で1,375gになります。交配後、約100日間経過して655gの体重が、12日間で約2倍の1,375gになることに注目すると、この期間に、母豚への給餌量を増加することが、重要です。逆に、飼料摂取量が少ないと、母豚は自らの体組織を分解して胎児へ栄養を与えることが起きます。胎児は子宮角から子宮頸管を通していく産道を通過する体力を身につけるのです。娩出されるということは、胎児にとって、素早く、スムーズに産道を通過しなければ、命の危険に曝されてしまいます。生まれたばかりの子豚の四本の爪を良く観ますと、爪の先端に柔らかい、軟骨のような、まるで靴を履いたように、子宮産道を傷つけないように、また、胎児自ら、素早く、外界に娩出されるように、黄色い靴が付いています。これは、娩出後、歩行をすると直ぐに外れてしまいます。このような事、ひとつとっても、胎児にとってはスムーズに娩出されることが、重要なことなので、この期間で一気に体重を増加させるのです。長い、妊娠期間の中で、この期間だけが、母豚への給餌量増加が胎児の重量増加と連動し、また、胎児も各臓器の細胞数を増加させて、体重増加をうけられる状態になっているのです。この期間に、母豚への飼料へ油脂を添加してカロリーを上げて生時体重を増加させたり、必須アミノ酸のひとつであるアルギニンを添加して、胎児の臍帯を太くして、死産を減らしたりすることができます。(図1)



VI. 交配後112日から分娩まで

いよいよ分娩が始まりますので、ここでは、母豚への給餌量を増加したままだと、難産になります。一般的には、給餌量を減らしますが、極端に減らしすぎると、やはり弊害が出てきます。ある報告では、最低でも1日の給餌量は1.8 kgを与えたほうが良いという報告があります。もし、1.8 kg以下になると次の弊害が考えられます。

- ①分娩後母豚は急速に痩せて、それ以降の飼料摂取を止めることがあります。授乳期間中はいかに、沢山の飼料を食べてもらい、泌乳量を上げてもらうことが、肝心なことです。母豚が飼料摂取を止められては、繁殖能力を発揮することに大きな弊害が現われます。
 - ②胃潰瘍の増加が見られます。胃の容積に対して、飼料量が少ないと、豚の胃食飼料量を減らすとより便秘が増幅されて分娩後の体調不良を引き起します。道部(噴門に近い)は食道と同様の重層扁平上皮粘膜ですので、強酸性の胃液には弱い部位が胃の中にあります。飼料量が少なすぎると、胃食道部位が胃液に曝されやすくなり胃潰瘍になることもあります。
 - ③便秘が大きな問題となります。
- 分娩後の母豚は普通でも便は固く、便秘気味で、飼料量を減らすとより便秘が増体調不良を引き起します。

VIII. 間違った考え方2項目

その1: 初産豚は2産次の発情が来にくいので体力を消耗しない様に、育成期間中に大きい身体(過肥?)にします。

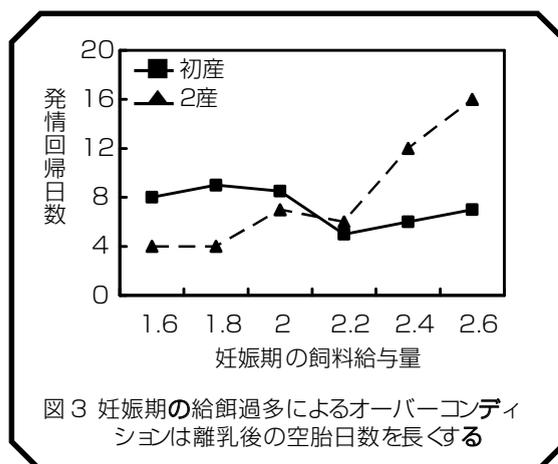
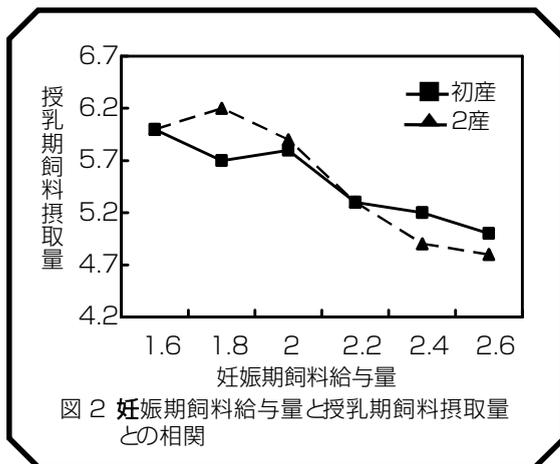
<間違っている理由>

育成期間中に過肥にしまうと初産の授乳中に母豚の食餌量が低下します。初産次の母豚の泌乳量が低下して哺育子豚が免疫低下し大腸菌症に陥り下痢を発症します。益々、母豚の泌乳量が低下して、母豚は離乳後の発情再帰が悪化します。もし、発情が来て交配しても2産次は産仔数が低下する可能性があります。育成期間中に過肥になった母豚は生涯働くことができず、農場全体とすると更新される母豚が繁殖能力の低下した母豚に多く占められるので、農場全体の成績が悪化します。

その2: 不受胎(着床不全)の原因は、分娩後の子宮の回復が悪いからです。

<間違っている理由>

一般的には、21日齢で離乳した母豚の受胎率、分娩率は85%を超えるので、所謂、殆どが受胎して分娩をします。不受胎になった母豚だけが、特別な理由がない限り、その母豚だけが子宮の回復が悪いとは断定できません(可能性はあります)。確かに、子宮の回復が悪い母豚もあるかもしれませんが、何故なのか、どの豚なのか、明確な理由はありません。豚の子宮は分娩後、早ければ、1週間~2週間でも受胎可能くらい回復をしています。不受胎の原因を明確な理由がないまま、子宮の回復が悪いからだ、判断すると真の不受胎の原因を見失い、改善対策を明確に出せないので、いつまでも受胎率の低下を招くこととなります。原因の多くは、母豚の過肥による繁殖障害です。(図2、図3)



IX. 妊娠期間中の過剰給与の三大弊害

その1: 余分な飼料費用の増高妊娠母豚に1日当たり、0.45kg余分に給与すると、年間で108kgの無駄がでます。

(約、5000円近く)窒素、リンの無駄な排泄により土壌汚染による環境破壊につながります。

その2: 授乳期間中に母豚の飼料摂取減少(食下量の低下)を招きます。特に、初産豚、2産豚ほど、妊娠期の飼料摂取量が多くなると、授乳期は飼料摂取量が低下し、泌乳量が低下します哺育子豚において大腸菌症などにより下痢が発症して離乳時体重が減少します。以下の、繁殖成績を悪化させます。

その3: 乳腺の発達を阻害します。乳汁分泌細胞数の減少を招きます。妊娠中に飼料給与量を増大させた方が、授乳期の飼料摂取量は減るという関係があり、引いては、泌乳量を減退させてしまいます。(図2)乳腺細胞を形成する設計図であるDNA、RNAが減少して、乳房に乳腺細胞数が減少します。